

ヒストリーインタビューによる高齢者理解と実習効果

表 志 津 子
秋 山 祐 子

1. はじめに

人口の高齢化が進み、介護の対象となる高齢者の数も年々増加している。高齢者を介護する者には、価値観を尊重する、人権を尊重するなど高齢者に対する深い理解が求められる。しかし現在は、少子化の進行、核家族化、家族形態の変化により、高齢者とともに生活する機会が少なくなり、高齢者の生活してきた時代背景や価値観を知ることが困難な現状にある。

介護福祉士養成課程では、「形態別介護技術Ⅰ」において高齢者介護を学習することになっている。入学してくる学生は、高校卒業直後が大半であり、高齢者との間に50年近い年代の開きがある。介護福祉士の養成は2年間であり、当学科では初回の実習を入学後半年に満たない時期に開始している。そのため、実習前に高齢者への理解を深めるということが求められる。

高齢者理解の方法としては、高齢者体験装具が用いられ、その効果も報告されている。しかし、机上で高齢者の生活を学び、装具をつけて高齢者体験を行なっても、高齢者の心情まで理解をしているとはいえない。そのため、高齢者を理解する手法の一つとして、3年前より高齢者へのヒストリーインタビュー（生活史聞き取り学習）を学生への課題としてきた。高齢者理解の方法として、小泉らは看護学生にライフヒストリーインタビューを行い、高齢者の人生や価値をうけとめているとその有用性を述べている¹⁾。このことから、インタビューは有効な方法であるといえる。

今回は、福祉を専攻する学生の高齢者理解に、ヒストリーインタビューが有効な手段であるか、初回の介護実習にどのようにインタビューが活かされているかを検討したので報告する。

2. 研究方法

2002年度人間福祉学科1年生68名を対象とし、ヒストリーインタビュー（以下インタビューと略す）実施前（7月）、実施後（9月）、および初回実習後（10月）にアンケートを行い、高齢者理解の実態と、実習での活用状況について調査した。また、高齢者観の変化については、Kruskal Wallis検定を行なった。

質問紙を作成するにあたっては、以下の方法を用いた。①2001年度人間福祉学科1年生のインタビューレポートから、KJ法により高齢者観とインタビュー場面の聴取内容を抽出した。②抽出した内容と、太湯らが学生から得た高齢者観²⁾を参考に質問紙を作成した。

ヒストリーインタビューは次のように行なった。

前期の講義終了日に、夏期休暇中にヒストリーインタビューを行なうよう学生に説明した。説明の内容は、①インタビューの対象は、祖父母または知り合いの高齢者とする。②青春時代の過ごし方、その時代の高齢者の過ごし方、現在までの過ごし方をインタビューする。③インタビューの内容、感想、インタビューの中で介護をする際に役立つと思ったことについてまとめる。

なお、学生の質問紙解答内容は匿名とし、結果使用の同意を得た。また、インタビュー内容から人物を特定すると思われる固有名詞等を削除した。

3. 結果及び考察

1) 学生の背景

(1) 祖父母と暮らした経験と年齢について

祖父母と暮らした経験については、「あり」と答えた者が70%、「なし」と答えた者が30%であった(図1)。

また、「あり」と答えた者のうち、祖父母と何歳まで暮らしていたかを年齢層別に見ると、「18歳以上」が最も多く52%、次いで「11～17歳」28%、「0～10歳」9%の順であった(図2)。

(2) 祖父母との遊びについて

①遊んだ記憶

祖父母と遊んだ記憶については、「あり」と答えた者が85%、「なし」と答えた者が15%であった(図3)。

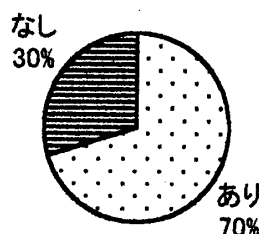


図1. 祖父母と暮らした経験

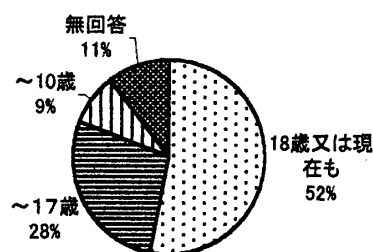


図2. 経験ありは何歳までか

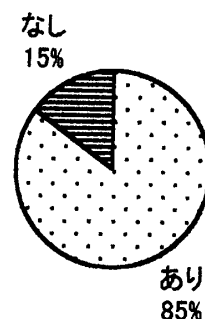


図3. 祖父母と遊んだ記憶

②遊びの内容

祖父母と遊んだ記憶のある者に、その内容を聞いたところ「散歩」が一番多く、その他「お手玉」「折り紙」「旅行」「話」「けんぱ」「ファミコン」「ドライブ」「花札」「百人一首」「竹馬」「花摘み」「山菜とり」「歌」など少数意見も多かった(表1)。

遊びの内容から、「お手玉」「花札」など祖父母が子どもの頃の遊びと、「ファミコン」「ドライブ」など現代の子どもの遊びが混在しており、昔の遊びを知らない学生がいることがわかった。

表1. 祖父母との遊びの内容

内 容	人 数	内 容	人 数
散 歩	6	おいかけっこ	1
お 手 玉	5	車 の 玩 具	1
折 り 紙	4	花 摘 み	1
旅 行	3	山 菜 取 り	1
話	3	竹 馬	1
け ん ぱ	2	ボ ー ル 遊 び	1
ファミコン	2	こ き り こ	1
あ や と り	2	海	1
ド ラ イ ブ	2	ト ラ ン プ	1
公 園	2	絵 本	1
花 札	2	塗 り 絵	1
百 人 一 首	2	畑	1
歌	1	計	48

(3) 高齢者の生活で知っていること

学生自身が知っている高齢者の若い頃の生活としては、「戦争中であつた」が最も多く54%を占め、次いで「貧しい」14%、「自給自足」「物がない」「学校に行ける人が限られていた」6%、「家族で助け合つた」4%、以下「ハイカラな生活」「強制結婚」「規則正しい」「元気だった」「その他（車・テレビが家がない）」各2%であつた（図4）。

高齢者の青年時代が第二次世界大戦前後にあり、物のない時代をすごしていたことを、学生の多くが理解していた。

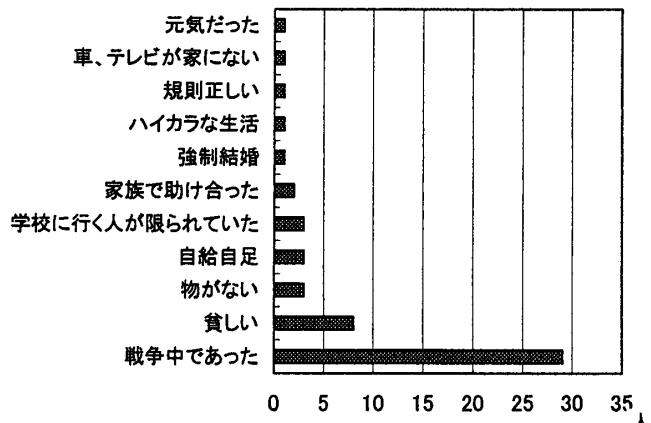


図4. 祖父母が若い頃の生活で知っていること

(4) 高齢者が大事にする価値観

高齢者が大事にしていると思われる価値観としては、「物を大事にする」が一番多く、その他「親（先祖）を大切に」「長生き」「生活様式（男性の威厳）」「お金・命」「地域の交友」「礼儀」「伝統行事」「生活の質」「思いやり」などとなっていた（図5）。

学生は、「物を大事にする」「親（先祖）を大切に」などの価値観を、高齢者の時代背景と併せて理解していた。

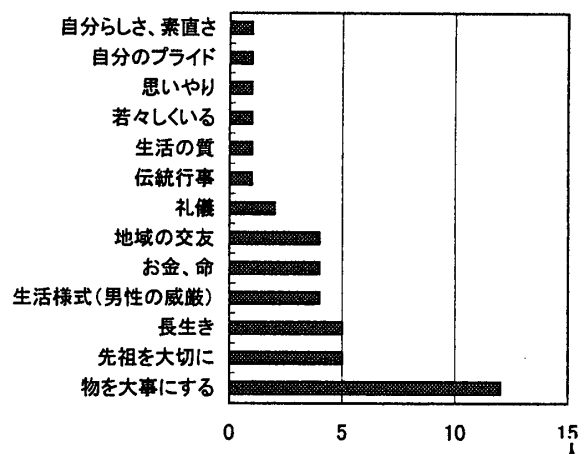


図5. 高齢者が大事にする価値観

2) ヒストリーインタビュー内容

(1) ヒストリーインタビュー対象者と年齢について

インタビュー対象者は、祖母が69%、祖父が21%、近所の人々が8%という割合であつた（図6）。

また、対象者の年齢層別については、「70～74歳」が37%と最も多く、次いで「75～79歳」33%、「65～69歳」15%、「80～84歳」10%、「85歳以上」5%の順であつた（図7）。

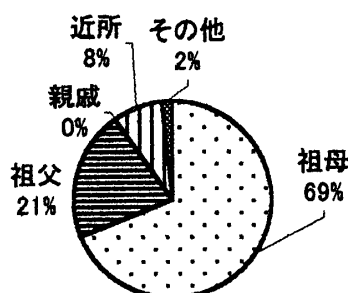


図6. インタビューの相手

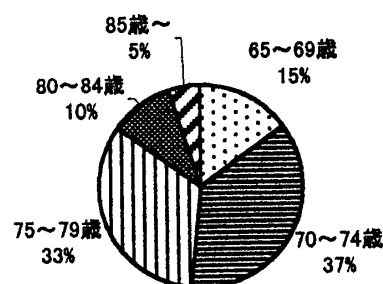


図7. インタビューした相手の年齢

表 志津子・秋山祐子

(2) インタビュー依頼方法について

「自分自身で依頼した」が最も多く93%を占め、次いで「親から依頼してもらった」5%、「友人に依頼してもらった」2%となっていた(図8)。自分自身で依頼できない学生がおり、祖父母との関係や、祖父母の死亡などを考慮する必要性のあることがうかがわれた。

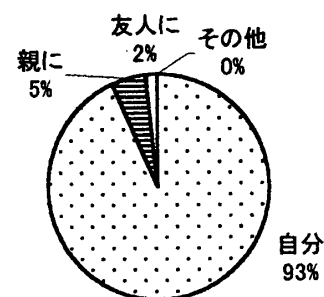


図8. インタビュー依頼方法

(3) インタビュー内容について

①聞いた話

インタビューをして聞いた話としては、「仕事」が一番多く20%、次いで「戦争」18%、「結婚」17%、「趣味」15%、「食べ物」14%、「家族」13%の順であった(図9)。

②印象に残った話

聞いた話の中で最も印象に残ったものは、「仕事」で24%、以下「戦争」21%、「食べ物」20%、「結婚」12%、「家族」11%、「趣味」8%となっている(図9)。

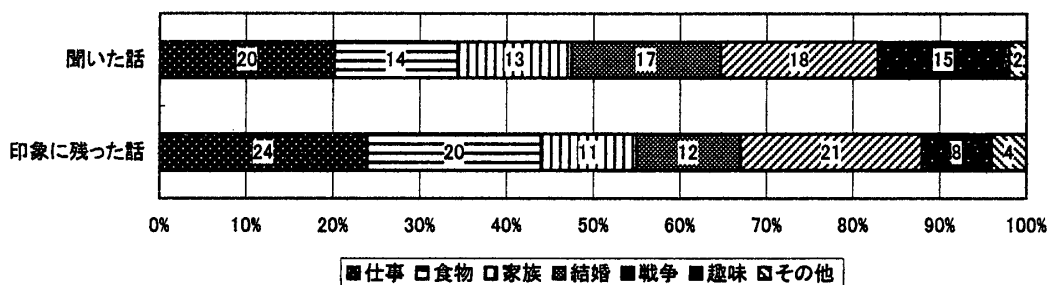


図9. 聞いた話と印象に残った話

(4) インタビューの感想について

一番多かった感想は、「今の生活とは違うと思った」で、他に「苦労したのだと思った」「尊敬すべきと思った」「考え方が違うと思った」などがあげられ(表2)、現在の自分の生活と比較しながら、高齢者の生活を受けとめていた。

(5) 高齢者に対しての感じ方について

高齢者に対しての感じ方について、インタビュー後に変化のあった者は76%、変化がみられなかった者は24%であった(図10)。

祖父母との普段の生活において、祖父母の青年時

表2. インタビューの感想 (人)

今の生活とは違うと思った	23
苦労したのだと思った	19
尊敬すべきと思った	11
考え方が違うと思った	10
過去の話聞いてよかった	7
もっと聞きたかった	6
戦争の話が印象的だった	5
すごいと思った	4
うれしかった	4
学ぶことが多い	4
楽しかった	3
びっくりした	3
面白いと思った	2
今までと違うイメージを持てた	2
かわいそう	2
趣味を行なっている	2
不安がなくなった	1
その他	3

代の話を聞く機会があれば、インタビューによる感じ方についての変化はないと予測されるが、変化した者が多数いたことから、普段このような話を聞く機会がないと思われた。

(6) 実習への意欲について

実習で高齢者の話が聞きたいかについて、「はい」と答えた者は93%と多数を占め、「いいえ」と答えた者は7%であった(図11)ことから、高齢者への関心は高まったといえる。

3) 実習への効果

(1) インタビューの記憶について

利用者とのコミュニケーションの際に、インタビューを思い出したかについては、「はい」と答えた者は58%、「いいえ」と答えた者は42%であった(図12)。

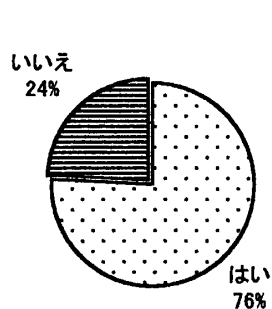


図10. 高齢者への感じ方が変わったか

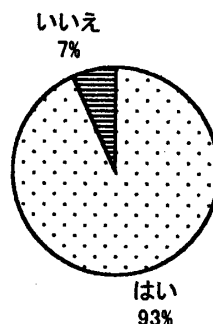


図11. 実習でも利用者の話を聞きたい

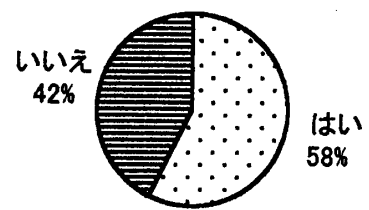


図12. インタビューを思い出したか

(2) インタビューの活用について

利用者とのコミュニケーションの際に、インタビューが役に立ったかどうかについては、「はい」と答えた者は61%、「いいえ」と答えた者は39%であった(図13)。

インタビューが実習でのコミュニケーションに役立った理由としては、「話をするきっかけになった」「話題が見つけた」「会話が弾んだ」「共通点が多かった」など(表3)があり、インタビューが高齢者とのコミュニケーションに有効であると考えられた。

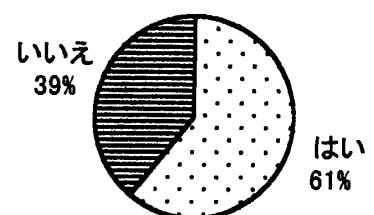


図13. コミュニケーションに役立ったか

表3. コミュニケーションに役立った理由 (人)

話をするきっかけになった	10
共通点が多かった	4
話題が見つけたやすかった	7
会話が弾んだ	7
関心を持って話を聞くことができた	2
尊敬して対応できるようになった	1
昔のことは鮮明に覚えているとわかったから	1
聞いていいことといけないうことの区別ができた	1
無回答	1
計	34

表4. コミュニケーションに役立たなかった理由(人)

忘れていた	7
障害者施設だった	5
昔の話はしなかった	4
インタビューで聞いた内容と別の話題だった	2
無回答	4
計	22

表 志津子・秋山祐子

役立たなかった理由としては、「忘れていた」(表4)が最も多かったことから、実習直前にインタビューの振りかえりや、コミュニケーションへの動機付けを確認する必要性のあることがわかった。

(3) 利用者との会話について

①話した内容

実習中に利用者と話をした内容としては、「家族」が一番多く22%、次いで「趣味」15%、「施設」「仕事」が各14%、「食べ物」13%、以下「結婚」11%、「戦争」6%、「病気」5%であった(図14)。

②印象に残った内容

利用者との会話の中で最も印象に残ったものは、「家族」が一番多く31%、以下「趣味」「施設」17%、「仕事」13%、「病気」7%、「食べ物」「結婚」「戦争」が各5%であった(図14)。

実習前のインタビューでは、仕事や趣味の話を聞くことが多かったが、実習では家族の話を聞くことが最も多く、家族と離れて暮らす利用者の特徴がうかがえた。

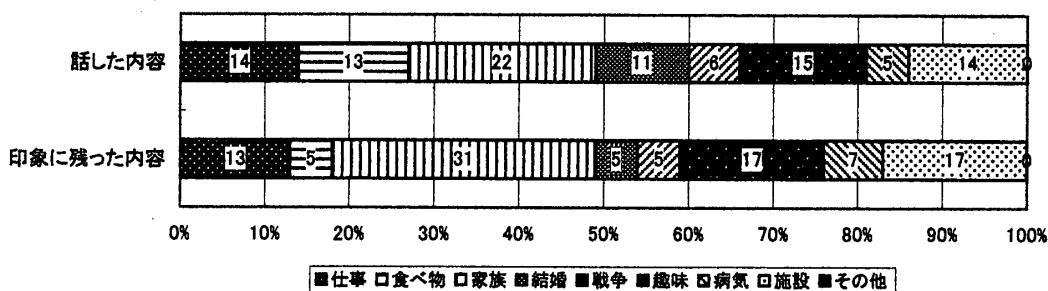


図14. 話した内容と印象に残った内容

4) 高齢者に対する気持ちの変化

①「ヒストリーインタビュー前」、②「ヒストリーインタビュー後」、③「実習後」の各時期の高齢者に対する気持ちを比較した。

その結果、「話をするのは楽しい」「好き」などの肯定的な気持ちの変化に、顕著な増加は見られなかったものの、「すぐ説教をする」「がんこ」「口うるさい」などの否定的な気持ちの変化は、大幅な減少傾向が見られた(図15)。太湯らが行った、老人ホーム実習前後の学生が持つ否定的イメージ調査では、「頑固である」が有意に減少しているという結果が得られており、今回の結果と一致していた²⁾。

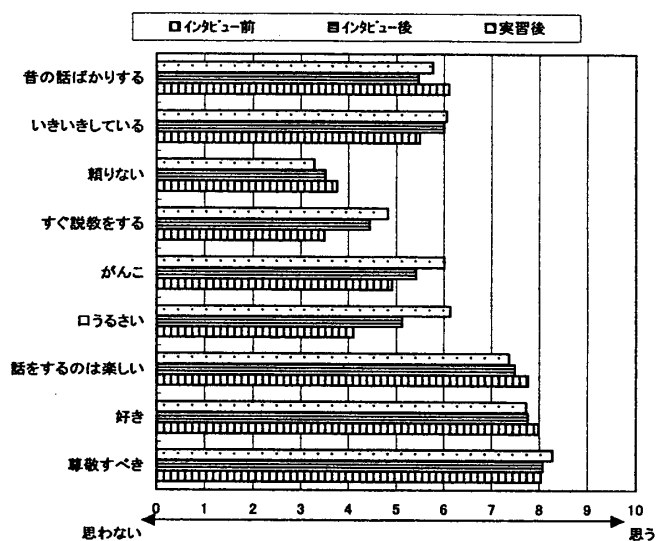


図15. 高齢者に対する気持ちと各時期での変化

このことから学生は、インタビュー、実習と段階を追うごとに高齢者への理解を深め、高齢者をありのままに受けいれていく様子が見えてきた。

なお、各時期の学生の高齢者に対する気持ちには、有意差は見られなかった。

4. まとめ

高齢者の介護には、コミュニケーションが重要な要素となる。しかし、実習では高齢者と「何を話してよいかわからない」「話が續かない」という現状があり、そのきっかけを示すことが指導者に求められる。今回の調査により、ヒストリーインタビューが、高齢者とのコミュニケーションにおいて「きっかけになった」「話題がみつけやすかった」などの効果を学生にもたらしているということがわかった。特に初回の実習において初めて高齢者と接するにあたり、前述のような学生に対する指導方法の一つを示すことができ、今後もインタビューを継続していく意味は大きいと考えられた。

今回、昔の遊びや歌について知らない学生がいることが調査結果から明らかになったため、今後は、コミュニケーションのきっかけとなる遊びや歌を、実習前に教えていく必要性が示された。また、実習前にインタビューの実施内容の確認を行い、実習での効果が高まるよう、その有用性を学生に示していくことが今後の課題としてあげられる。さらに、インタビューの記述内容からも、考察を加えていきたい。

謝辞

この研究にあたり、調査に協力していただいた人間福祉学科1年生と、まとめに協力していただいた道下千春さんに感謝いたします。

引用文献

- 1) 小泉美佐子、伊藤まゆみ、宮本美佐：老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューを取り入れた学習効果，老年看護学， Vol. 5， N0. 1， 140－146， 2001
- 2) 太湯好子、酒井恒美、初鹿真由美ら：看護学生の老人に対する否定的イメージ老人看護教育についての一考察－，第21回看護教育， 112－115， 1990